

18世紀英国式庭園と「シャラワジ」(“*Sharawadgi*”)

松 平 圭 一

18世紀英国式庭園と「シャラワジ」(“*Sharawadgi*”)¹との関わりについて述べたい。まず図1を見てみたい。この作品は、ウィリアム・マーロウ(William Marlow, 1740-1813)の『キュー庭園内にあるアルハムブラ、パゴダ、モスクのある自然風景』(*A View of the Wilderness, with the Alhambra, the Pagoda, and the Mosque in Kew Gardens c. 1763-5*)である。実はこの一枚の風景画こそ、18世紀英国式庭園とシャラワジについて見事に語ってくれるものである。また付けられた題名も、18世紀英国式庭園を理解する上で重要である。

この18世紀英国式庭園の風景を理解するにあたって、まず触れなくてはならないのは、18世紀英国式庭園とシャラワジについてであろうと思われる。ここで注意しなくてはならないのは、シャラワジという語の響きが連想させる中国、そしてその庭園様式を18世紀英国式庭園は導入しようとしたのではないということである。18世紀は英国式と呼ばれる庭園様式が確立されていった時代であった。英国式という意味は、自然らしい自然を庭園の理想的な姿とする「自然風風景庭園」(natural landscape garden)を指

¹この「シャラワジ」(“*Sharawadgi*”)という言葉は本論でも指摘しているように、ウィリアム・テンプル(William Temple)が用いたのに始まっている。詳細は本論にて述べるので、ここでは便宜上マイケル・サイムズ(Michael Symes)著の *A Glossary of Garden History* (Shire Garden History Series No.6)の定義を挙げておきたい。

“A pseudo-Chinese term suggesting elements of novelty, surprise and irregularity. Sir William Temple used it in his *Upon the Gardens of Epicurus* (1685) to denote what he claimed were such elements in Chinese gardens, although the word does not exist in Chinese nor were Chinese gardens of that time irregular....”

す。そしてこの庭園が醸し出す美的空間と雰囲気、それらを構成する美意識をうまくひと言で言い表わしたのがシャラワジとされた。この不可解なシャラワジの起源についてはのちほど触れることとする。

こうした背景から、18世紀英国式庭園とシャラワジは不可分の関係として、英国庭園文化の奥行きを深いものとしていった。また別の視点からは、英国式庭園と中国語とされる奇妙な言葉シャラワジとの関係が生まれるのは、マルコ・ポーロの『東方見聞録』以来、西洋から未知の国東洋、とりわけ眠れる獅子と例えられたように、深遠な中国文化の権威を借りて、英国庭園を他にない英国独自の英国式とする上での凄みを増す狙いがあったのこととも十分考えられる。当時、英国陶磁器の発生を促したのは中国や日本の陶磁器の呉須の藍の色と自磁の白の色であり、そこに描かれた風景や花鳥風月の雅びであった。また墨の濃淡で描かれた中国山水画は、のちの日本の浮世絵がヨーロッパ絵画に与えた影響に匹敵するものであった。どれも東洋、とりわけ中国の権威を高めた事例である。シノワズリー(中国趣味)の流行から、より大きな枠組みとして、オリエンタリズム(東洋趣味)へと集約し、その枝分れとして、ジャポニズム(日本趣味)へと派生していった。だが、再び明確に述べておかななくてはならないのは、先述したように18世紀英国式庭園は例外が若干あるものの、真の意味で中国の庭園様式を造り出そうとしたのではないということだ。そうした導入は異質なものを取り込みながら、美の空間を創造していく英国式庭園の特質にある。異なる様々な要素、例えば英国式庭園が成立する以前は、フランスやイタリアで発達し、英国でも数々造園された古典主義(Classicism)の整形庭園(formal garden)² が絶頂期にあったが、それらの要素や東洋の大国中国

²庭園史における「古典主義」と「整形庭園」の定義については、赤川 裕著の『英国ガーデン物語』(研究社出版)6頁に詳しい。特に「古典主義」(クラシシズム)が上流支配階級(クラス)と連関していることを指摘している点は重要である。

の庭園要素を英国式庭園は取り込んで、英国独自の美を生み出したのが英国式の庭園なのだ。勿論、その中心核には、英国が長く育んできた英国独自の自然観や自然に対する美意識、そして経験主義や個人主義を成立させていった人間の感覚や経験による知識に価値を置く精神性がある。³

図1を英国式庭園と述べるに異論を持つ方がいよう。しかし、18世紀以降の庭園史を知った今日の我々は、この絵に描かれた庭園は英国式自然風風景庭園と見てよいし、見るべきである。異和感を持つとすれば、図2のような、ケイパビリティ(ランスロット)・ブラウン(‘Capability’ Lancelot Brown, 1716–83)⁴の庭園の存在があるからだろう。そこで、英国式庭園と呼ばれる自然風風景庭園について、古典主義整形庭園と比較しながらその特徴を述べてみたい。

図1と図2に描かれたのは、どちらも英国式自然風風景庭園であり、イレギュラーであること(irregularity)、変化すること(diversity)、そして多様であること(variety)という三つの構成要素を不可欠なものとして成立している庭園である。こうした要素は、自然そのものが保持している特質であり、これに美を見極め、自然に人間の手を加えることをできるだけ避けて、自然そのもののありのままの姿を手本と理想とした「自然主義」の庭

³赤川 裕『英国ガーデン物語』(東京：研究社出版, 1997) pp. 31–33.

松平圭一「自然主義の庭園と古典主義の建築の共存—British Worthies からのアプローチ—」『日本ジョンソン協会年報 No. 21』(日本ジョンソン協会, 1997). pp. 14–17.

---。「18世紀英国における経験主義・個人主義成立の背景—Henry Wotton, Francis Bacon, and Inigo Jones—」『活水論文集 第40集 英米文学・英語学編』(活水女子大学・短期大学, 1997). pp. 55–78.

⁴「ケイパビリティ」(可能性)“Capability”という名がランスロットという名前に代わって用いられるようになったのは、ブラウンが「この土地には『ケイパビリティ(可能性)』がある。」と造庭するにあたってしばしば口にしていたことに始まる。造庭依頼者は、ブラウンが土地の可能性を引き出す達人であると認めたわけである。また、アレキサンダー・ポープ(Alexander Pope)が、*An Epistle to Lord Burlington* (1731)で“Consult the Genius of the Place in all, . . .”(土地の霊と座して相談せよ)と発言したことがその源にはある。

園様式が英国式庭園ということになる。これに対して、18世紀以前にフランス、イタリアといった大陸先進国で隆盛を極めたのが、形(form)に自然を整えることを重視した「古典主義整形庭園」である。この庭園様式は、自然を無秩序なものとして、秩序を与えるべく造型化して、人間が支配するといった「古典主義」の価値観と精神性が貫かれたもので、規則性(regularity)と対称性(symmetry)、そして幾何学的であること(geometry)という要素により構成されており、その特徴から、「自然主義」の英国式庭園とは正反対な構成要素を持っている。図3はこうした特徴を示している。また別な言い方をすれば、英国式が“Sense”を重視する人間の五感に訴え、経験することに配慮した庭園であるとするれば、大陸式の整形庭園は、「古典主義」というエピセツトが示すように、“Taste”を重視した支配階級や権力を造型に代弁させる庭園であった。⁵ 今、英国式自然風風景庭園は、個人各々が自らの感覚で直に経験することを重視した庭園と述べたが、こうした背景には、フランシス・ベーコン(Francis Bacon, 1561-1626)、ヘンリー・ウオットン(Henry Wotton, 1568-1639)、ジョン・ロック(John Locke, 1632-1704)等に支えられた英国近代の精神性である経験主義と個

⁵英国式庭園が“Sense”重視の庭園であり、古典主義の整形庭園が“Taste”重視の庭園であることは *An Epistle to Lord Burlington* (1731) の “And something previous ev’n to Taste—’tis Sense” の詩行に従って分けたものだが、古典主義の名が示すように整形庭園を理解するにはギリシャ・ローマの故事来歴や文学など深い学識と教養、つまり“Taste”を必要とした。ごく限られた上流支配階級の者のみが楽しむことを許された庭園だったのだ。それは、人間各個人の感覚と経験、つまり“Sense”を重視した英国式庭園とは異なる。この相違をポープの先駆的発言は見事に言い当てている。また視覚的な資料としては、図7ウィリアム・ホガース(William Hogarth)の作といわれている *Taste* と名付けられ、バーリントン伯(Lord Burlington)のチズウィック・ハウス(Chiswick House)の門が描かれているカリカチュア版画があるが、門の上部に掲げられた“TASTE”と彫られた部分に刷毛を持った人物が塗料か汚物と思われるものを投げつけようとしている。バーリントン伯は英国式庭園の唱導者であり、18世紀を代表する“Sense”重視の新しい価値観をもった人物であった。なお、古典主義が上流支配階級のイメージに直結することについては、註2を参照されたい。

人主義を密接強固にし、シャフツベリー伯(3rd Earl of Shaftesbury, 1671–1713)、バーリントン伯(Richard Boyle, 3rd Earl of Burlington, 1695–1753)に代表されるホイッグ(Whig)勢力の台頭やアイザック・ニュートン(Isaac Newton, 1642–1727)が要職を任った王立協会(The Royal Society)の成立など、様々な分野にわたって英国精神の根幹に深く影響していたことがある。⁶

図1も図2も、英国式自然風風景庭園であり、自然主義の庭に重きを置いた庭園であると述べた。ウィリアム・チェンバース(William Chambers, 1723–96)が、ブラウン全盛時代にあって、ブラウンの造庭しか考えられぬ時代に、ブラウンの造庭を真っ向から批判して、チェンバース自ら信じる造庭をキュー(Kew)庭園に庭園装飾(garden ornaments)を配置することで示そうとした姿勢はなみなみならぬ決意を感じる。チェンバースの反ブラウンの姿勢は、当時の文学思潮や美意識に大きな論争を巻き起こすこととなった。⁷ 今日、ブラウンとチェンバースとどちらに軍配があがったかは明らかだが、チェンバースの登場は英国庭園史において、些細な出来事として扱うには躊躇せざるをえない重要性を秘めている。

チェンバースは、スウェーデン生まれで、父はスコットランド出身の商人であった。1740年にスウェーデンの東インド会社に務め、ベンガルに赴いた。1743年に最初の中国訪問を商船の荷積監督として果たし、広東に6ヶ月間滞在した。また2度目の訪問は1748年であった。2度の訪問と滞在の経験が、チェンバースが庭園について発言するもととなった。その他に、チェンバースはイタリアとパリにおいて建築について学んでいる。1755年

⁶赤川 裕『英国ガーデン物語』p. 32.

⁷1772年チェンバースが *A Dissertation on Oriental Gardening* を出して、晩年を迎えていたブラウンにブラウンの造庭方法をめぐる批判をし、美意識論者や詩人を巻きこみ大論争がおきた。ブラウン擁護を積極的行なったのがウィリアム・メイソン(William Mason, 1725–97)であった。

にロンドンで建築家として仕事を始め、その2年後から1762年まで、キュー庭園に雇われた。⁸ チェンバースがイタリアやパリで建築を学んだことは、18世紀英国が建築の時代を迎えて、パラディアン様式に代表される古典主義建築への目ざめにあったことは想像に堅い。当時パラディアン様式は、18世紀の政治体制が、トーリー(Tory)から、ホイッグへと移り、それにより、新時代到来を認識させる目的で英国中に流行した。⁹ 新しい感覚招来をもたらす古典主義建築様式の導入に貢献したのは、イニゴ・ジョーンズ(Inigo Jones, 1573-1652)であった。ストウ(Stowe)庭園の「英国名士聖人廟」(*British Worthies*)は、その事を伝えるホイッグと英国独自の自然観と美意識の記念碑である。¹⁰ このような時代にあってチェンバースは、庭園装飾としての建築に能力を発揮した。キュー庭園はその実例である。また特段すべきは、1775年のサマーセットハウス(Somerset House)があり、この建築は18世紀の時代を具さに証言している。(図5)

図1のチェンバースが取り組んだキュー庭園も、図2にみられるブラウンが改造を施したブレニム・パレス(Blenheim Palace)庭園もあとの時代を知った我々の目からみると、その行き着く先は、英国式自然風風景庭園という点で同じであった。しかし、同じではあったが行き着くまでの道の辿り方は異なっており、それがチェンバースに代表される方法とブラウンに代表される造庭方法の二通りあった。英国式自然風風景庭園は、ウィリアム・ケント(William Kent, 1684-1748)に始まるとみてよい。この庭園様式は、庭園の中に、自然主義の庭を優位に置きながら、建築や彫像ある

⁸*The Concise Dictionary of National Biography*. Oxford: Oxford University Press, 1992. 1: 519.

⁹松平圭一「18世紀英国における経験主義・個人主義成立の背景」pp.55-78.

Tom Williamson. "The Challenge to Geometry," *Polite Landscapes: Gardens and Society in Eighteenth-Century England*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1995. 60-63.

¹⁰松平圭一「自然主義の庭園と古典主義の建築の共存」pp.14-17.

いはグロット(洞穴)といった古典主義の庭園装飾を共存させてきた。¹¹ 自然主義の庭と古典主義の庭園装飾、とりわけ建築を庭園内に共存させる英国式自然風風景庭園は、人間は自然の一部という思いと、人間なるもの、つまり文化なるものに対する捨て切れぬ思いが、それぞれ自然主義の庭と古典主義の庭園装飾に形象化された結果生まれた造型の集積イデオムである。造型として英国式庭園があらわれる前に、理論面において、逸速くイレギュラーなること、変化、多様性により構成される自然主義の庭の美について発言したのはヘンリー・ウオットン(Henry Wotton, 1568–1639)だが、彼が述べた「喜ばしき混在」(‘*Delightful Confusion*’)¹² の庭園は、18世紀において具体的な姿となったのだ。図4のストウの庭園は、理論が実践されたよい例となっているが、ケントが陣頭指揮にあった時、ブラウンはまだ若く、ケントのもとで見習いとして天才造園家の一步を踏みだそうとしていた。

ケントに始まる英国式自然風風景庭園は、18世紀が進むにつれて、目的地を同じくしながら二手に分かれていった。一方は、ケントによる手法を踏襲するかたちで、庭園に自然主義の庭と古典主義の庭園装飾を共存させ、異質な要素を様々に取り入れることで、変化と多様性による陰影と深奥を持つ風景を醸成し展開させる造庭方法と、もう一方は、庭園から古典主義の庭園装飾を極力排除、弱めて自然主義の庭を徹底的に求め、限りなく自然に近づく造庭方法の二つである。前者は、図1にみられるチェンバーズが辿った道であり、また後者は、図2のブラウンの辿った道である。この二つの造庭方法は、当時の美意識論の高まりの中で、それぞれピクチャレ

¹¹ *Ibid.*

¹² Henry Wotton “The Elements of Architecture,” *The Genius of the Place: The English Landscape Garden 1620–1820*. Ed. John Dixon Hunt and Peter Willis. Cambridge, Mass.: Massachusetts Institute of Technology, 1988. 48–50.

スク型とランドスケープ型(またはブラウン型)とも呼ばれた。¹³

そこで、ピクチャレスク型と呼ばれる自然主義の庭と古典主義の庭園装飾を共存させながら、18世紀英国式自然風風景庭園をめざした造庭に注目してみたい。図4のケントの手になるストウの庭園は、アレクサンダー・ポープ(Alexander Pope, 1688-1744)をはじめ、国外において自然思想に深い影響を与えた、ジャン・ジャック・ルソー(Jean-Jacques-Rousseau, 1712-78)を魅了した。¹⁴ また、ピクチャレスクという美意識を18世紀のもっとも洗練された言葉にまで高めたウィリアム・ギルピン(William Gilpin, 1724-1804)は、『ワイ川見聞印象記』(*Observations on the River Wye*) (1782)を執筆する以前にこのストウ庭園で深い感銘を受け、ピクチャレスク理論に開眼した。ストウ庭園についての美学的分析と美意識論は、『ダイアログ』(*A Dialogue upon the Gardens of the Right Honourable the Lord Viscount Cobham at Stow in Buckinghamshire*) (1748)に書かれ、やがてギルピンは庭園から出て、英国全土のピクチャレクの旅へ赴いていく。ギルピンのストウ庭園についての印象は、自然主義の庭と古典主義の庭園装飾(特に建築)が庭園内において、次々に様々な風景を生み出すよう仕かけられていることに感嘆している。ギルピンのピクチャレスク理論の根本がこの庭園が醸し出す美的空間と美の雰囲気にあったことは重要である。庭園という大枠の中に、異質なもの、自然主義の庭と古典主義の庭園装飾を取り込んで、風景を変化させ、多様化させるケントの造庭方法は、図1にみられるようにチェンバースへと受け継がれて、中国通のチェンバース

¹³ こうした英国式庭園をランドスケープ(ブラウン)型とピクチャレスク型に分けての議論について述べた研究書は数多くあるが、特に以下の書を挙げておくこととする。Walter John Hipple, Jr. "The Price-Knight Controversy," *The Beautiful, the Sublime and the Picturesque in Eighteenth-Century British Aesthetic Theory*. Carbondale: Southern Illinois University Press, 1957. 278-83.

¹⁴ John Martin Robinson. *Temples of Delight: Stowe Landscape Gardens*. Hong Kong: National Trust, 1994. 111.

と連動しているかの如く、シャラワジが結び付くこととなった。

チャンバーズは先に述べた中国訪問と滞在経験を活かし、中国の庭と建築について言及した本を数冊出した。こうした本が出され、注目をされるのも18世紀英国の精神性と深く関わっている。そうした本の中で、1757年に出され、庭園論を展開している『中国の建物、家具、服飾、機械と用具についてのデザイン』(*Designs of Chinese Buildings, Furniture, Dresses, Machines, and Utensils*)で、自然について“Nature is their (Chinese painters’) pattern, and their aim is to imitate her in all her beautiful irregularities”¹⁵ と述べ、中国の画家を引き合いに出しながら自然の美しいイレギュラーなることこそ求めるべき目標と語っている。庭も同様であることが述べられている。¹⁶ ピクチャレスクが「絵のような」または、「絵に相応しい」風景をさして用いられるわけだが、その構成要素はイレギュラーなる美である。画家であったケントが造園家に転身し、それをチェンバーズ、さらにギルピンが受け継ぐことで収斂された道筋が見える。チェンバーズは、彼なりの中国の自然観と自然に対する美意識を述べたあと、中国庭園から、庭園奥義として、“a variety of Scenes”¹⁷ により、庭園は構成されなくてはならない点を会得するとともに、“winding passages”¹⁸ により庭園が巡れるようになされている点を指摘しているが、これはケントにやはり始まる“serpentine”(蛇行曲線)をイレギュラーの美とした感覚と同じである。¹⁹ そして、“to the different view, each of which is marked by

¹⁵William Chambers. “Designs of Chinese Buildings, Furniture, Dresses, Machines, and Utensils,” *The Genius of the Place: The English Landscape Garden 1620–1820*. Ed. John Dixon Hunt and Peter Willis. Cambridge, Mass.: Massachusetts Institute of Technology, 1988. 283.

¹⁶*Ibid.*

¹⁷*Ibid.*, 284.

¹⁸*Ibid.*

¹⁹松平圭一「シドニーが見た自然について—自然の形象化の流れのなかで—」『活水論文集 第38集 英米文学・英語学編』(活水女子大学・短期大学, 1995). p. 187.

a seat, building, or some other object.”²⁰ へ導かれるように造庭された中国庭園の美点をあげている。庭園装飾と自然とが融合して展開される風景はケントの英国式自然風風景庭園の造庭と相通じるものであると同時に、図1のキュー庭園はその実例となっている。こうしてみると、何もチェンバーズはケントと違う造庭をしたわけではなく、イレギュラーなること、変化すること、多様であることを構成要素として次々と展開する風景の庭園をケントの伝統から受け継いだにすぎない。しかしチェンバーズは、この伝統的な自然風風景庭園の造庭方法にウィリアム・テンプル(William Temple, 1628-99)に代表される中国文化や東洋への憧れ、つまりシノワズリーとオリエンタリズムへの興味の高まりと畏敬の念を最大限利用し、権威付けを英国式自然風風景庭園に施した。図1のキュー庭園は、こうした造庭方法で、世界の異なる風景を次々展開し、鏤めることで、英国式自然風風景庭園の美的空間と雰囲気醸し出しているが、これこそがシャラワジと呼ぶものであった。ここには中国式の楼閣が描かれている。パゴダ(pagoda)と呼ばれる仏教に由来する塔だ。これがあるからシャラワジというのではない。

再び図1を見てみよう。手前にはアルハンブラのイスラム王朝宮殿様式の建物が、中央は今述べたパゴダが、そして後方にはイスラム教寺院建築のモスク、こうした庭園装飾と周辺に見えるイレギュラーなままの自然、それらが共存し、風景を次々と変化させ多様化させている。このことは別の18世紀の重要な視点を与えている。それは18世紀英国を含めた西洋の世界に対する眼差しである。この世界観が政治力や技術力の発達、さらにそれともなう軍事力と結び付いた時、西洋諸国がそれ以前とは比較になら

²⁰William Chambers. “Designs of Chinese Buildings, Furniture, Dresses, Machines, and Utensils,” *The Genius of the Place: The English Landscape Garden 1620-1820*. 284.

ぬ規模で乗り出した植民地支配へと直結していく。図1は英国がその後1世紀以上にわたって世界各地を植民地化していく前夜とでもいってよい瞬間をとらえている。美的空間、造型の集積イデオロム、総合芸術としての英国式庭園が、植民地支配へと連動していくという英国庭園文化の暗の部分が、チェンバースが意識したかどうかに関わらず、キュー庭園の造庭には示されている。この点について図5をみると、チェンバースが設計した1775年のサマーセットハウスのファサードの四体の像が目につく。この四体の像は、世界の四大文明圏、アジア、アメリカ、アフリカ、そしてヨーロッパを象徴し飾られたものだ。これら四体の像はどれかが突出することなく、同じ大きさと等間隔で並べられている。西洋の独占、ヨーロッパ各国によるアジア、アメリカ、アフリカへの植民地支配と優越感の兆しは全く感じさせない配置となっている。未だこの時点では、ヨーロッパ以外の文明に対して憧れと畏敬が保たれていることを窺わせる。憧れから搾取へという展開は、憧れた文明に直接接触したいという願いが実現するやいなや急速にすすんでいった。18世紀後半から19世紀をへて今世紀半ばまでこの構造が続いたことを我々は知っている。これに関連して図6を見てみたい。これは、プリンセス・オーガスタ(Princess Augusta)の1785年キュー庭園の改造案である。²¹ 図6右端のパゴダの部分を見るとパゴダの影が長く伸びているのがわかる。周辺部分を円形に刈取り、中央にパゴダが置かれていることで、パゴダの影が時計の針のように見える。これは、英国庭園が18世紀以前から設置してきた日時計(Sundial)²²を意としていたことを

²¹Ray Desmond. Plate 12 in *Kew: History of the Royal Botanic Gardens*. London: Harvill Press, 1995.

²²庭園における庭園装飾である日時計の役割と象徴性および歴史の変遷について詳しく述べている書は以下の通りである。David R. Coffin. “The Sundial” in “Transcience,” *The English Garden: Meditation and Memorial*. Princeton: Princeton University Press, 1994. 8-26. 及び、水之江有一著「145 年月(Year)」『図像-リーパとその系譜-』(東京: 岩崎美術社, 1991) pp. 290-91.

窺わせるものだ。それまで日時計は庭園にあって、庭の訪問者に現実の世界と時の存在を思いおこさせ、非日常的空間から日常的空間へ戻す効果とともに、人間は死すべき存在でそれから逃れられない「メメント・モリ」(死を覚えよ)²³に直面させることで無常観を演出する効果を持っていた。しかし、18世紀のキュー庭園のパゴダの日時計は別の影響をもたらしたと考えられる。それは、死を避けられぬ人間が時が限られていることに対峙した時、そのエネルギーは庭園から急速に外の未知な世界に向かって流れ出すという点である。庭園に歩みを止めては居られず、庭園の外へと馳騁していった。ギルピンの英国全土の自然風景にピクチャレスク的美を求めての旅や先に述べた植民地支配など様々な行動に派生していく一つの切っ掛けとなった。日時計は昔日の宇宙の法則を知る写し絵の役割としてではなく、時代と呼応して、人間の有限なることを悟らせて可能な限りを尽くすという躡きにも似た行動に出させた点は侮れない。

最後に「シャラワジ」(*“Sharawadgi”*)という不可解な言葉について述べたい。これまで述べてきたように中国語起源についても確定されてはいないが、18世紀英国式庭園へと収斂されていった美意識、それにより創り出される空間を言い表わす言葉として中国文明の響きを持って使われてきたことは確かだ。そして、シノワズリーやオリエンタリズムという言葉以上に権威ある言葉として流行した。この言葉がさす美とは『破調の調』、すなわち美しさをくずして美しさを表わす、“Order in Variety”²⁴である。最初にこの言葉を用いたのは、ウィリアム・テンプルである。テンプルが自らの庭園論である『エピクロスの庭について』(*Upon Gardens of Epicurus:*

²³「メメント・モリ」について、絵画論にとどまらず、文化史の視点から詳説してあるのが以下の書である。若桑みどり著「絵画を読む」『NHK人間大学 1992年10月-12月テキスト』pp. 37-46.

²⁴“Order in Variety” (*concordia discors*)については以下の書が詳しい。Malcom Andrews. “Poetry and the Discovery of British Landscape,” *The Search for the Picturesque: Landscape Aesthetics and Tourism in Britain, 1760-1800*. Stanford: Stanford University Press, 1989. 18-21.

or, *Of Gardening, in the Year 1685*) (1692)で、“without any Order or Disposition of Parts”²⁵ で中国の庭園は目に訴える美を生んでいると指摘し、その美的感覚を「シャラワジ」(“Sharawadgi”)と云うそうだと断言して以来、言葉の由来が不明として専門家を悩ませながらも、18世紀英国式自然風風景庭園と直結した重要語として用いられた。今日この言葉を起源については、ジェームズ・スティーブンス・カール(James Stevens Curl)の“a corruption of *So-ro-kwai-chi* (meaning widely scattered a disorderly arrangement in short spaces enlivened tastefully by disorder), according to the *Quarterly Bulletin of Chinese Biography, . . .*”²⁶ の説と、極めて説得力のある説として、マイルズ・ハッドフィールド(Miles Hadfield)の中国語起源説を否定し、テンプルがオランダにおいてこの言葉を聞き知ったことから、日本語起源の“*soro-wa-ji*,” ‘not being symmetrical’²⁷ つまり、「不揃い」を意味している日本語の古形であるという二つの説である。いずれにせよイレギュラーなることが美であることをさす言葉がシャラワジであったことに相違ない。

これまで述べてきたように、18世紀英国式自然風風景庭園は、その庭園が醸し出すイレギュラーを根本に構成された美的空間と雰囲気、その状態をうまく言い表わす言葉としてシャラワジと深く結びついた。18世紀前にテンプルに始まるこの言葉の使用は、中国の様々な造型、建物、陶磁器、絵画、家具など具体的なものへの関心を高めた。シノワズリーという流行を生み、オリエンタリズムへと発展し、ジャポニズムへと連動していった。憧れは一部不幸にして植民地支配へとイレギュラーな展開をしてしまうが、異質なものを取り込み美としていく英国式庭園の美が英国とヨーロッパの文化に深い奥行きを与えたことは見逃せない。

²⁵William Temple. “Upon Gardens of Epicurus: or, Of Gardening, in the Year 1685,” *The Genius of the Place: The English Landscape Garden 1620–1820*. Ed. John Dixon Hunt and Peter Willis. Cambridge, Mass.: Massachusetts Institute of Technology, 1988. 96–97.

²⁶James Stevens Curl. “Chinoiserie and Orientalism,” *Georgian Architecture*. Newton Abbot, Devon: David and Charles Book, 1993. 65.

²⁷Miles Hadfield. “Change in the Wind” in “France Triumphant 1660–1719,” *A History of British Gardening*. 1960. Middlesex: Penguin Books Ltd., 1985. 177.



图 1 William Marlow (1740—1813). *A View of the Wilderness, with the Alhambra, the Pagoda, and the Mosque in Kew Gardens, c. 1763—5.* Fig. 94 in *Sir William Chambers: Architect to George III*. Ed. John Harris and Michael Snodin. New Haven: Yale University Press, 1997. 65.



図2 *Blenheim Palace Gardens: Queen Elizabeth's Island (Island of Poplars) in Queen Pool.* Photo. By the Author. Oxfordshire, 23 Aug. 1994.

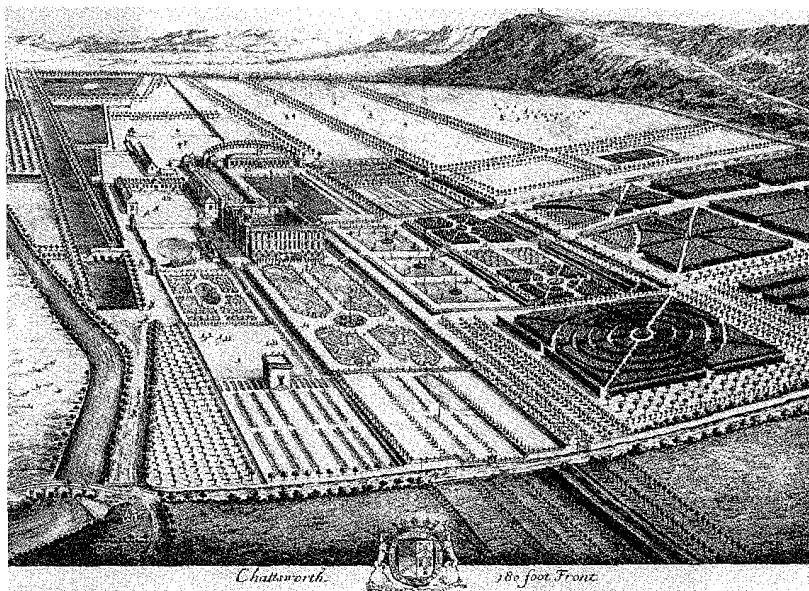


図3 Jan Kip and Leendert Knyff. *Chatsworth in September 1699 in Chatsworth: the Home of the Duke and Duchess of Devonshire.* By Duchess of Devonshire. Devonshire: Devonshire Countryside Ltd., 1994. 32.



图 4 *Stowe Gardens: British Worthies in Elysian Fields.*
Photo. By the Author. Buckinghamshire, 24
Aug. 1994.



图 5 *Asia, America, Africa, and Europe, Somerset
House, Strand Elevation, Courtyard Facade, 1778,*
Designed by William Chambers, Fig. 271 in *Sir
William Chambers: Architect to George III.* Ed.
John Harris and Michael Snodin. New Haven:
Yale University Press, 1997. 184.



図6 Plan of Princess Augusta's Garden and Part of Adjacent Richmond Gardens, c. 1785. Plate 12 in *Kew: The History of the Royal Botanic Gardens*. By Ray Desmond. London: Harvill Press, 1995.

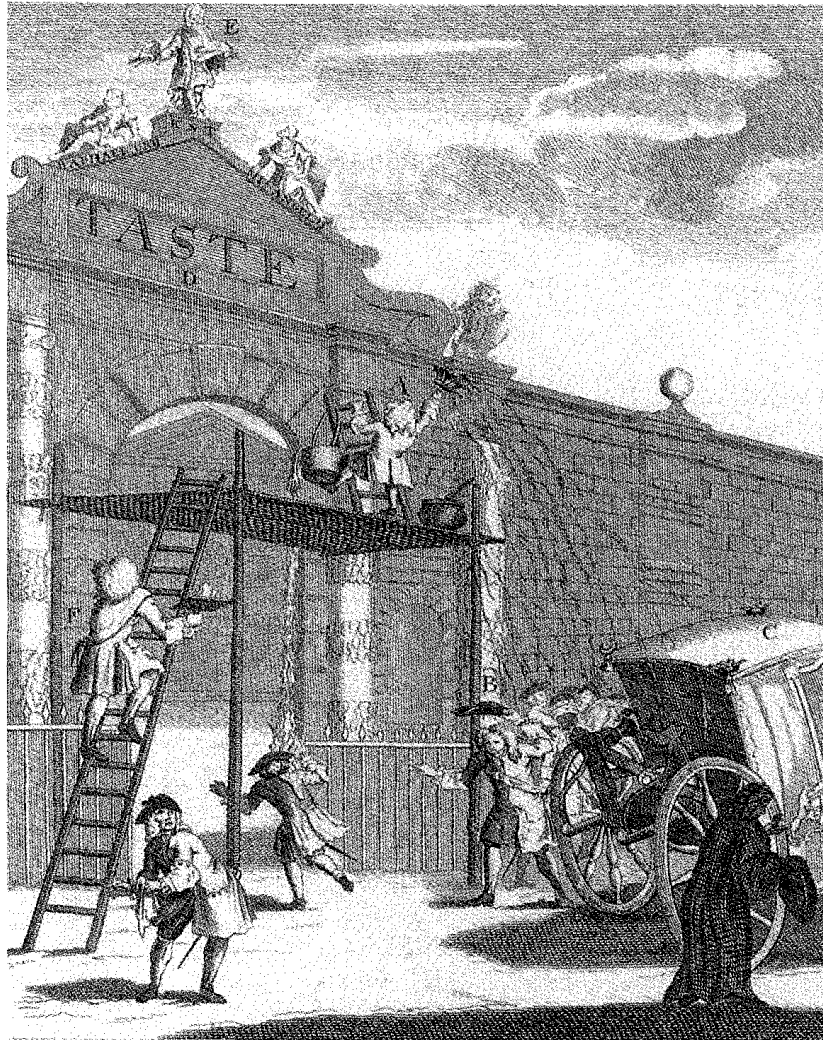


図7 *Taste*, an anonymous satirical engraving of Lord Burlington's Gate at Chiswick House, 1731–32. Plate 10 in *Pursuing Innocent Pleasures: The Gardening World of Alexander Pope*. By Peter Martin. Connecticut: Archon Books, 1984. 23.

*尚、本稿は1998年5月25日京都で開催された日本ジョンソン協会第31回大会シンポジウム『18世紀英文学とインド・中国』において、この討論に先駆けて行なった「18世紀英国庭園と“Sharawadgi”」と題した発表と討論における発言内容を加筆したものである。

1999. 1. 29. 受理